

我が師の恩

下定 雅弘

この文章を、今まで、何度、頭の中で書いてきたろう。どうやら、書き残しておかずにはおれないようだ。書きたいのは、吉川幸次郎先生・小川環樹先生・清水茂先生、そして高橋和巳先生——というよりも、高橋さんのこと。

これを語るためには、自分が大学院に入るために計五年浪人していることをまず言うておかなければならない。履歴を見ていただければわかることだが、マスターに入るために二年、ドクターに入るために三年の歳月を使っている。なぜ、そういうことになったのか？後悔はしていない。あの頃は、まさに政治の季節であり思想の時代だった。ご多聞に漏れず、私もあの時代のあの空気の中で、学生時代の全てと院生時代の半ばを過ごした。中国文学の研究者として生きていこうと本当に覚悟を決めたのは、ドクターに落ちてからのことである。だが、つづめていえば、勉強していなかった。それだけのことだ。

吉川先生

吉川先生。そのご恩を思うと、ほんとうに頭が下がり、自然に手を合わせてしまう。三回生になった春、西部食堂で昼ご飯を食べていると、尾崎雄二郎先生が、私の所に近づいて来て言われた、「吉川先生が杜甫の詩の訳注を書かれている、その字引を引く仕事をする気はありませんか？」。吉川先生は、退官後、杜甫の詩の訳注を本格的に始めようとして、その仕事の手伝いを求めておられたのだった。で、それから三年半、私がマスターに入る前の年の夏ごろまでか、毎週月曜日の午後、上賀茂の羽田記念館の二階で、吉川先生と過ごす日々が始まったのである。筑摩書房でアルバイトとして働かれる形だった。

私の仕事は、先生が杜甫の詩の語の何かをメモして私に渡される、すると、その語が『佩文韻府』と『文選』に載っているかどうかを調べ、有ればその箇所につ箋をつけて、吉川先生にお見せするというものである。先生が書かれる原稿の清書もした。私は今も昔も悪筆だが、先生の文字はまことに流れるように書かれていて、たしかに判読の難しいことがあった。私はとにかく出版社の人が見てわかるように、かな釘流で書き写したのである。見る本は、『佩文韻府』と『文選』だけではなく、その他の本もしばしば見た。徹夜して何度も見なおしたが、ついに出てこないということもあった。たばこを買いに行くのも私の仕事だった。先生は、猛烈なヘビースモーカーで、たばこを口にされていない時はほとんど無かった。灰が長くなってきて、ああ、もう落ちる、落ちると、しょっちゅう冷や冷やしながら見ていたのを覚えている。

吉川先生は、出版社の方が訪ねてくると、必ず、「京大の中文の下定雅弘君です」と私を紹介してくださった。「週刊朝日」だったと思うが、毎週、日記を載せておられ、それにも私がお手伝いをしているのを書いてくださったことがある。

いろんなことを教えていただいたはずだが、愚かにも忘れたことが多い。よく覚えていることが一つある。古典の文章が読めないことを言ったら、「読めん時は四字ずつ切って読んでいけばいい。そのうちに分かってくる」と言われた。

卒論を書き終えた時、「どういう論文を書いたのか？話してみなさい」とおっしゃった。私が、「いえ、とても先生にお話できるようなものではありません」と言った所、吉川先生はこう言われた。「君は卒業論文を書いたのだから、堂々たる専門家である。話してみなさい」と。その論文は「曹植詩考」と題する拙いもの(未発表)。気持ちだけは、こもっていたか。

大学院の入試に落ちること二度。三度目は、他の大学の院も受けようと考えて、吉川先生に相談した。東大と名古屋大学を受けようと思うのですが……と。すると、吉川先生、「東京には中国を重んずる気風がない」「入矢義高は字引を引きすぎる」。結局、他の大学の院入試は受けなかった。

大学院に入って以後、吉川先生は、下定ではダメだと判断されたのだろう。深沢一幸君に仕事を交代させられた。

それからはたまにしかお会いすることができなくなった。一九七四年の二月か三月、小川先生と入矢先生の退休記念パーティの時である。パーティは、熊野の近く、教文センター(京都教育文化センター)で開かれたが、もう暗かった。センターの前まで来ると、熊野の方から、吉川先生がゆったりと歩いて来られる。私を見ると、先生は歩みを速め、両手を前にさし出しながら、「おお、下定君、元気かい、どうしてるかね？」と、私の両手を包んでくださった。

一九七九年四月二十八日消印のお葉書を大切に持っている。柳宗元について考えた最初の論文の抜き刷りをお送りしたら、書いてきてくださったもの。「三週目の中国の旅から帰って旬日まだぼんやりしている処に抜き刷り着 その後どうしているかと気にかかっていたが」で始まるこのお葉書のことは、拙著『柳宗元—逆境を生きぬいた美しき魂—』の「あとがき」に記した。

先生は、一九八〇年四月に亡くなられた。私はオーバードクターで、同志社大学の非常勤講師と予備校の関西文理学院の講師をしている時だった。先生は、私の状況にかかわりなく、あんなにも不勉強であったが、いつも私を暖かく見つめ、包み、励ましてくださった。こうして書いていると、涙を禁ずることができない。

吉川先生の学問が少しはわかるようになったのは、ずっと後のことである。ああ、吉川先生は、あの時にこんなことを考えておられたのだと、しばしば思う。また、この頃は、「長恨歌」の結句や陶淵明の「自祭文」の結びなどについて解釈に苦しみ、吉川先生のご本を見ると、先生があまりに率直に「わからない」と書いておられるのに驚き、先生がすぐそばで椅子に坐って背中を反らし、上を見ながらうなづいておられるように感じたりもする。

小川先生

小川先生は厳しい方だった。それは、私のような不勉強な学生に対して厳しかったのである。

覚えていること。「毛詩正義」の演習だったと思う。井波律子さんも出ておられた。ある院生が担当で発表したが、それは調べが極めていい加減なものだった。小川先生のこめかみが怒りで青筋を立てピクピクとふるえていたの思い出す。小川先生はしかしその怒りを口にはされず、授業を続けられた。

大学院に合格する前だ。論文は「王粲の七哀詩」を提出したのだが、これについては、小川先生にしばしば質問に行った。「一首だけならねえ(調べることができる)」と言われたこともあったが、ある時、質問が終わってお部屋を出ようとする、「今年はよく勉強したねえ」と言って下さった。この言葉には涙がにじんだ。

修士論文のテーマについて先生の研究室に相談に行った。夏休み前のことである。阮籍に取り組みたいことをいい、きっかけになったのが吉川先生の「阮籍の詠懐詩」であることをいうと、「あそこまでなら誰でも書ける、問題はその先だ」と言われる、そして、「阮籍は詩の数も多い。もう夏休みに入る。残っている時間は多くない。作品を全部読むのは難しいだろう」。そこで、「嵇康はどうでしょうか？」と尋ねると、「嵇康の深刻さが、君に分かるかねえ」と言われた。結局、私は「阮瑀の五言詩について」を修論として提出したのである。

博士課程には進めなかった。今後のことについて先生のご意見を伺おうと思い、小川先生のご自宅を訪ねた。応接間に通され、先生は着物姿で現れた。腕を組み、俯きながら、「もうちょっと勉強してもらわないとねえ」と言われた。全く勉強が足りないということである。他に何を話したかは覚えていない。時間は短かった。ただ、先生はこの時、日本中国学会に入るようにと、その場で書類を出し、推薦のサインをしてくださった。私が研究の道をめざすことについては、それで良いとの態度をはっきり示してくださったのである。

小川先生は一九七四年三月に退官された。私は、小川先生が在任中にはドク

ターに進学できず、一九七六年、ようやく編入学試験に合格して博士課程での勉強を始めるのである。

小川先生は気さくな方であり、学生・院生がたむろする研究室によくふらりと入ってこられては、たばこを吸いながら談笑された。だが学生との基本的なつきあい方は、私の見る所、学生がどれだけ勉強しているかが基準であったと思う。いや、学生だけではなく学者に対してもそうだったろう。吉川先生についても上に記したようなことを言われた。紛争の後しばらく、「中国文学報」は教員と院生との共同の編集になっていて、その編集委員会の場で、誰かの口から長沢規矩也の名が出た時、「あれが、学者か！」と冷たく言い放たれたのを覚えている。

その先生の学問に対する厳しい態度が、私の姿勢を正し、研究者として、学び、仕事をする私の今日の基礎を作ってくくださった。ドクターを落とされたのは、その時は辛いことであったが、年を経るほどに小川先生への感謝の思いは深まっていく。

小川先生が、病状思わしくないこと、「入院されているので近いうちに行つてあげてほしい」と、寛文生先生に言われたのは、一九九三年八月、柳州の学会に小池一郎君と参加している時だった。小池君と私は、帰国後すぐの八月二十四日、叡電の八瀬遊園駅そばの高折病院に先生をお見舞いしたが、その時、すでに先生は起き上がることもできず、なんとか、私たちが誰であるのかはお分かりになったようだった。その数日後、先生は逝去された。

清水先生

清水先生もまた、私にとっては、研究者になっていく長い歲月、その節目ふしめでありがたい言葉をいただき、多大のお世話をしてくくださった大切な先生である。

大学院の試験に二度目に落ちた後のことだと思う。西部食堂で昼食を食べようと並んでいたら、ちょうど清水先生も並ばれた、いや、先生はもう食べられて、出てきた所だったのかも知れない。「先生、私は研究者はムリでしょうか？」と、思わず尋ねたのである。先生、「いや、君は論文がおもしろいから」と言って去っていかれた。二度目の不合格で悩んでいた私にとって、清水先生のこのお言葉は大きな励ましになった。

ドクターを落ちてしばらくのこと。清水先生の研究室でうかがった。「僕は〇〇君と君は通すつもりだったんやけどね。ところが蓋を開けてみたら、二人とも平均が八十点に足りない。君は 79.8 やった (79.6 だったかも知れない)」。この年、ドクター進学を希望したのは数名いたが、進学したのは川合康三君だけだ

った。

ドクターにまたしても落ちてからのこと、清水先生に呼び出されて、「いつまでもドクターにこだわることはない。名古屋の大学で助手のポストがあるから、そこに行ったらどうか」と言われる。お礼は申しあげたが、私は、ドクターに通ることが自分の研究者としての出発になる、これは必ず乗り越えないといけないことだと思っていたので、この話はその場でお断りした。

ドクターに通る前か、通った後か、もうわからない。ある時、先生の研究室で言われた、「どうも娘が一年お世話になりました」「えっ!?!」「いや、関西文理学院で君の漢文の講義を娘が聞いてました。言うと、君がしゃべりにくくなるやろと思って、言いませんでした」。汗が噴き出る思いをした。

これはドクターに入ってからか、研究の方法・記述の方法として、忘れがたい言葉がある。「研究で大事なのは比較やね。比較のない研究はあきません。その比較にもコツがある。同じようなものを持ってきて、ちがうと言う。逆に、全然ちがうものを持ってきて同じやと言う。これですわ」。全くその通りである。清水先生に教えられたこととして、このことは、卒論を指導する時、学生に必ず言ってきた。

私は、「日本中国学会報」に、柳宗元について二篇、韓愈について一篇(これは鹿児島大学に勤めてから)、論文を掲載していただいたが、先生の貴重な時間を奪ってはいけないと思い、いつも清水先生に何も相談せずに投稿した。最初の論文は「柳宗元柳州詩一葛藤の鎮静とその由来一」(三三号、一九八一年一〇月)である。多分、一九八一年の二月か三月だったろう。研究室に呼び出され、「東京に行ってみたら、君の論文が出てたんでびっくりした。書き直しということで、なんとか掲載可になりました」。その後の二篇についても、清水先生は編集委員会でサポートをしてくださっている。

清水先生には、学生時代から鹿児島大学に職を得るまで十数年にわたり、さまざまな具体的な問題でお世話をいただいた。先生は、あの世でやはり鼻の先を親指と人差し指でこすりながら、時々、「うん、うん」と、軽く咳払いして、私に話しかけておられるように思う。改めて心からありがとうございましたと申し上げたい。

高橋さん

高橋先生……というより、高橋さんは、私が三回生の時に東京から赴任して来られた。ある先輩から聞いた話。吉川幸次郎先生が出版社をまわられて、「高橋はこれからは学者として生きてゆく、原稿はもう高橋に依頼しないように」

と言われたとか。

高橋さんの授業では、「三国志武帝本紀」の演習と、「李商隠」の講義に出席した。「武帝本紀」の演習はひどかった。学生が、である。一年上の三宅太治さん、同期の中谷豊君・北島宣雄君・小池一郎君らと共に出ていた。演習の第一回、高橋さんが学生に読ませようとするが、誰も予習をできていない。「君ら、ほんとに勉強せんなあ。しゃあない、僕が読みます」と言われたのを覚えている。

卒論は曹植について書くことに決めた。文学部旧棟一階に在った高橋さんの研究室を訪ね、教えを請うたことがある。高橋さんは、平凡社の『漢・魏・六朝詩集』を貸してくださった。この本は、結局返すことができないままに、今も私の書架にある。

四回生、一九六九年の一月十五日、卒論を出したその日に、京大における所謂「大学紛争」が本格的に始まった。学生部がバリケードで封鎖されたのだ。それから間もなく、二月のある日だったろう。高橋さんは、自分の講義について採点をしないとっておられ、それは必須単位であったから卒業できないことになる。私の場合、大阪の夕陽丘高校の国語の非常勤講師となるのが決まっていたこともあり、採点はしていただきたいと、お願いに行った。高橋さんは少し話ただけで採点することに同意してくれ、そのあと、思いがけず飲み連れて行ってくださった。岡崎の、当時、キャッツアイという部落解放同盟の朝田善之助が経営するとかいうキャバレーがあったが、その向かいの居酒屋のカウンターで、私たちは夜っぴて話をした。高橋さんは、その居酒屋に向かう途中、「下定君、僕は大学を辞めるよ」と何度も言うておられた。自分は、作家だ、やはり小説を書きたいと、その時、力を入れていた「人間として」という雑誌について語っておられた。私が何を話したのかはもはや覚えていない。高橋さんの話したことの幾つかを今もはっきり覚えている。その一つに、高橋さんから、これは決して人に言うてくれるなといわれた、高橋さん自身についてのことがある。それは高橋さんとの約束であり、私は墓場に持っていく。ならば、なぜ書くのかと言われようが、それは、高橋さんがそのような人であったということを言いたいためだ。学生の一人に対して、あんなにも自分をさらけ出し、思いのままを語ってくれたあの一夜を私は忘れることができない。そして、あの日が高橋さんに会った最後であったと思う。高橋さんは、一九六九年三月、京大を退職し、一九七一年五月、不惑を前にして亡くなられた。

高橋さんは徹頭徹尾やさしい人だった。なぜ、そんなにも人のことを思い、その身になるのだろうか……と思う。政治の季節・思想の時代がまもなく終わる

うとするあの時に、高橋さんと出会い、あのひたむきな魂に直接触れることができたのは、私の青春の、暗いけれども、しかしパチパチと何かが光っていた忘れがたい一瞬だ。あれから四十数年、何よりも、私にとって高橋さんは、やはり『李商隠』の高橋和巳である。岩波詩人選集の『李商隠』は、私が最も繰り返し繰り返し読む本であり続けている。高橋さんの面影と李商隠をだぶらせながら、私は李商隠の詩をこれからも読んでいこう。

附記：入矢義高先生にお教えいただいたことについては、『入矢義高先生追悼文集』（汲古書院、二〇〇〇年）に記した。入谷仙介先生の思い出は『人生に素風有りー入谷仙介先生追悼文集』（研文出版、二〇〇五年）に記した。

二〇一二年三月三〇日

二〇一二年十月三日修改